九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

リツ・サンハーラ（承前）

小野島，行忍

https://doi.org/10.15017/2557080

出版情報：文學研究. 11, pp.35-46, 1935-04-10. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

リツ・サンハーラ（承前）

小野島行忍譯

III 秋（六一）

一

濱芒（六二）の白妙の衣さきし蓮のはなやげる顏
ゐひ心なる鶴（一〇）の唳の踝飾の音こゝちよく
みのれる稻のほそやかなる肢も妍はしく
姿うつくしき秋は花よめのごとく來りぬ

（六一）秋（Sarad）は舊曆の七月十六日より九月十五日までなり。

（六二）kāsa（ハマスヽキ）は學名 Saccharum spontaneum といふクワホン科の草にしてその花は白し。

二

大地は濱すゝき（六二）に夜は光すゞしき月に
川みづはハンサ（一〇）に池はしろすゐれんに
林の邊は花の重みに垂下れし縞素馨に
また園生はそけいに眞しろにぞせらる

三

さばしりて美しき魚を帶緒（六三）とし
岸に居りたつ白き鳥の列を瓔珞
氾き沙汀を胡瓜（八）の腰とせる川は

愛悅(うれしさ)をそゝられし艶女(あだしめ)にも似て
いまやしづ〳〵と行く

（六三）rasanā-kalāpa（帶緒）は數條の緒より成る帶なり。

四

しろがね硨磲はす根にも似てしろく
水ふりすてゝ百層もたやすくすゝみ
風の煽りにゆるゝ雲もて天の一方は
よき塵尾(六四)にあふがるゝ王の如くみゆ

（六四）cāmara（塵尾）は犛牛の尾や孔雀の羽などにて作られ、涼風を送り蠅など蟲を追ふに用ひらる。

五

ときしむら睫黛(まつげすみ)(一三)の色もて美しき空
午時花(六五)のなせるくれなゐのおほ土(つち)
玉まきの蓮みつほとりの池塘(つゝみ)とは
地上いづれの若うどのこゝろをか
あこがらさゞらむ

（六五）午時花（bandhūka, bandhu-jīva）は學名 Pentapetes phoenicea といふアヲギリ科の草にして、その花は赤くして日中に咲き翌朝しぼむ。

六

あやに美しきこずゑそよ風になやまされ
咲きいづる花のむれに芽さきもやさしく
ほとばしる蜜はうつゝなき蜂に吸はれし
コーヰダーラ(六六)は誰の心をかやぶらざらむ

（六六）kovidāra は學名 Bauhinia variegata といふマメ科の木にして黑檀の一種、その花にいろ〳〵ありてよく女の麗しさになぞらへる。

七

星のつどひのいみじき飾りをつけ

月のかんばせ雲に鎖さるゝを免れ
隈なき素影の羅衣まとひし小夜は
をとめ若女(六七)にも似て日ごと生長る

(六七) 秋になりて一日々々と夜の長くなり行くをいふ。

八

波のうねゝゝあひるの味にみだされ
堤のほとりもせに鷺てう鶴むらがり
はすの花のこにて色そめなせし川は
あまねく鶴(一〇)のなくねもて人を悦ばす

九

見るめ嬉しく心虚けしむる光の華鬘し
つめたき雫したゝらす清々しきつきは
夫離れ(六八)の毒矢にきずつけられし麗女の
うつし身をいとど悩ます

(六八) 旅にある夫と離れて暮してゐる妻にはこの頃ことに清涼なる月の夜にひとり寝するは心身ともに堪へがたきを云ふ。

一〇

實の重みに垂れし稲生そよがし
花もてうなだれし梯沽(六九)ゆさぶり
ひらきし蓮し(七〇)げれる池搖る風は
わかうどの心をわりなく動かす

(六九) taruvara (梯沽) は學名 Erythria Indica といふ木にして其の花は深紅色なり。
(七〇) vana (茂) を「水」と讀むもあり。

一一

ゑひごゝろなる鶴(一〇)のつがひもて飾られ
開きしきよき紅蓮や青蓮もうつくしく
波の畝々そよ吹く曉の風にたちし池は
いたく人の心あこがらす

一二

因陀羅の弓はくもの肚裡にきえ
天の旗なる稲妻もいまは閃かず
まな鶴は羽風もて雲井を煽らず
孔雀もかほをもたけて空をみず

（七一）Balabhid は「バラ鬼の殺戮者」の意にして空界の大神 Indra（因陀羅、帝釋天）の異名なり。

（七二）balaka は小さき鶴なり、或ひは baka（學名 Ardea nivea）の雌なりと云はる。いま假りに「眞名鶴」と譯す。

（七三）孔雀は雨季にみごもる。故に雨雲の現はるゝや欣舞し鳴きて之れを望み見るなり。こゝは「さきに雨季には頭を上げて雨雲を見し孔雀もいまや秋になりて、は空を見ず」の意なり。

一三

愛神は舞奏づるをやめし孔雀をすてゝ
唄よき鶴に近づきカダムバ・クタジャ
アルジュナ・サルジャ・ニーパを去り
花さきて美しきしまそけいをおとづる

（七四）kutaja は學名 Wrighia antidysenterica といふ木にして其の種子は驅蟲劑として用ひらる。

（七五）nipa は kadamba（註四七）の一種なり。

一四

にんじんぼくの花の香もて怡悅しく
のどかに栖める鳥のむれに哢々しく
青蓮のまなこせる鹿あたりに立てる
林園は人ごゝろ儻らす

（七六）sephalika（にんじんぼく）は學名 Vitex Negundo といふクマツヅラ科の木にして漢名は牡荊といふ。

一五

曉に白蓮素蓮睡蓮を搖りしきりつゝ

そのまじはりにいとゞ冷やかになり
葉末に宿るつめたき雫ふるへる風は
わりなく思慕をそゝる

一六

豊の堆は地にみち長閑に立てる
あまたの牛のむれもうつくしく
鶺(一〇)と鶴の集に呀々しき村の邊は
ひと〳〵をいみじくよろこばす

（七七）印度にては稻穗を牛の蹈むにまかせて稻扱に代ふ、こゝは其の情景なり。

一七

麗女のなまめかしき足どりは鶺(一〇)に
月の顏容の美しさは開きしはすに
醉ひごゝろなるまなざしは青蓮に
また優しき眉のしなはさゞなみに
たちまさられつ

一八

若芽はなの重みに垂れし綠こき蔓草は
嬌女の飾つけしかひなの麗しさを奪ひ
無憂樹(七八)の花かとかゞやく八重そけいは
齒もあらはに白き笑(七九)の素影をくらます

（七八）無憂樹（aśoka, kaṅkeli）は學名 Jonesia asoka といふマメ科の木なり。

（七九）「白き笑」とは大笑の意なり。

一九

愛妻はいとふさやかなる烏羽玉の
いみじき曲髪に八重素馨をかざし
また殊尤き金のみゝ環(一〇)つけし耳に

とりぐ〳〵の青蓮をよそほふ

（八〇）kuṇḍalesu とあるに據る。

二〇

こゝろ飛びたつばかりの嬌女は
香水つけし眞珠の瓔珞を奶丸に
帶緒（八三）をいと脹よかなる腰の坡に
また音もやさしき玉纏の踝飾を
蓮華はづかしき足に今やかざる

二一

雲きえて月と星みちたる空は
さきし睡蓮に蔽はれ紅鶴すみ
綠玉の光もてる水美しき川の
いみじき明麗をうばふ

二二

秋たつや
睡蓮にふれて冷たき風そよぎ
雲の群さりて十方こゝちよく
みづすみ地は淤泥もかわきて
空は月の光くまなく星輝けり

二三

あかつきに
美しき少女の顏ばせの如き蓮は
日の光に夢破られていま開くも
するれんは月輪西山にしづむや
夫は旅なるにひ妻のゐみに似て
かけひそむ

二四

いとしき妻のくろき眸の美しさを青蓮に
さやぐ黄金の飾帶をゐひ心なる鶴の聲(一〇)に
唇のやさしき麗しさを午時花(六五)にしのびて
こゝろ亂れし旅人はいまや泣く

二五

美しき秋たつ明麗は
たをやめの顏に月の暉きを
玉の踝飾に愛しき鶴の聲(一〇)を
またこゝろ奪ふくちびるに
午時花のやさしさを殘して
いづこともなく行く

二六

ひらきしはちすの顏ほころびし青蓮の目
咲きしばかりの濱すゝきの白妙の衣裝ひ
するれんの優しき美しさもてる此の秋は
いろめきたてる愛女にも似ておんみらの
心にこよなき悅びをあたへよ

IV 冬(八一)

一

新芽立と果實うつくしく
ロードラ咲き禾米みのり(八二)
蓮はいろあせ霜ふりつゝ
この冬ぞ來ぬ

(八一) 冬 (Hemanta) は舊曆の九月十六日より十一月十五日までなり。

（八二）lodhra は學名 Symplocos racemosa といふサハフタギ科の木にして其の花は黄なり、この樹皮より赤色の撒末をつくる。

二

胸もと愛でたき美女の奶丸は
心ひく洎芙蘭のいろに映えて
ゆきか素馨かつきかとまがふ
眞珠の瓔珞もてよそほはれず（八三）

（八三）nālaṃkriyante とあるに據る、冬になりて冷たき裝身具はつけざるを云ふ。

三

手纏うでわは麗女の双の腕に
あたらしき羅裳は胡瓜（八）の腰に
うすぎぬは脹よかなるむねに
はだつかず

四

艶女は黄金や玉の曄ける
綺羅帶もて腰もかざらず
ハンサ（一〇）の聲なす踝飾もて
蓮華のやさしさそなへし
うつくしきあしを裝はず

五

嬌女は鬱金をぬりしはだみ
花じるし（八四）傳けし蓮の顏ばせ
また伽羅かぐはしき頭をと
ともねのために身じまひす

（八四）pattra-lekhā は顏または身に麝香などの香料もてかきし飾りのすぢなり、今かりに「花じるし」と譯す。

「冬」を男になぞらへたるなり、而して斯かる際には女の泣くが妥當なるに此の句は異れり。

六

たはむれの
つかれに顔やつれ色ざめ
悦びえて幸はふをとめは
齒さきにやぶられ惱める
くちびる惟ひて高笑まず

七

奶房ふくよかなる胸の邊めく
うるはしき大地(八五)にさしよりて
その刮に遺瀨なさ催せる冬は
葉ずゑにやどるつゆを滴てゝ
あかつきに泣くにも似たり

(八五) sobhim の次に mahim もしくは bhūmim などの字の省かれたるものと見るべし、即ち「地」を女に

八

成りなりたる禾米みちて
くじかの群もうつくしく
愛らしき鳴さゞめかしき
村の邊はひとの心憬らす

九

醉ひ心なる鵞鳥もて飾られ
ひらきし青蓮もうつくしく
水すみていと清々しき池は
若人(八六)のこゝろをうばふ

(八六) yūnām とあるに據る。

一〇

霜にもよほす冷たさにみのりて
風にゆり頻かるゝプリヤング(八七)は
夫離れし美女にも似ていろざむ
いとしきひとよ(二)

一二

齒きずあざ〳〵しき唇と
つめに抓き痕つけられし
奶房もてうら若き麗女の
ばさらに戯れしことこそ
かたらるれ

（八七）priyangu 別名 govandanī は女がさはると花咲くと云はるゝ蔓草にして、色化粧料となる。

一一

くちは花のみつの香ににほひ
肌みは息ざしの風に薫らされ
こひのよろこび溢るゝひとは
互に身をのけて長まりねむる

一三

鏡を手にせるある愛女は
暾ほてるや蓮の顏を粧ひ
また戀びとに口露すはれ
齒さきにやぶられし唇を
ひらきてみる

一四

また現身いたく戯れのつかれに慘み
蓮華の目はよるを睡らでいとあかく
髪の房こきたれ肩の邊にとけて縺れ
なごやかなる日の光にほてらされし
ある嬌女はねむり行く

一五

また髪のはし雲にも似てくろく
眼よかなる秀立の奴房の重みに
ほそ身しなやける或るをとめは
怡悅しき香うせし徒なる華鬘を
頭よりとりて毛すぢをとゝのふ

リッ・サン ハーラ

一六

また悅び湛へ唇に優美なされ(八八)
はだみは爪にきずつけられて
こき垂れし愛でたき烏羽玉の
曲髪に目ほそめしある嬌女は
戀人に樂しまれし身を眺めて
はだぎをきる

(八八) cāru-sobhā (優美) とは男に齒などにて つけられし傷のなまめかしき樣を云ふ。

一七

また長き戯れにつかれ
やるせなさ催して細身いとしどなく
眼よかなる奴の邊うれしさに毛だち
あやに美しきある艶女は香油をぬる

一八

とり〳〵に樂しく若女の心を奪ひ
實りたる豐の禾米は村の邊にみち
常にいと心ちよく鳴の列めぐらし
霜を具したる此の時はおんみらに
さちをあたへよ

（八九）「此の時」とは冬をいふ。

（未完）

第十輯所載「リツ・サンハーラ」修正及正誤

（頁）	（段）	（行）	（修正）	（誤）	（正）
六九	上	五	Vaṃsastha	Vaṃsāstha	
六九	下	七	Paṇsḱior	Paṇsikar	
七二	上	九	ちつぶち	ちつぶら	
七二	上	一二	Vima	Vima	
七六	下	一	ほためき	はためき	
七七	下	一三	こめる	こるめ	
七九	上	一二	東海	東海	
八〇	上	八	amu-lepama	anu-lepama	
八〇	下	六	しづこゝなく	しづこゝろなく	
八一	上	八	ときめかず	ときめかす	
八二	上	一一	小鈴など	小鈴や玉など	
八三	上	九	にいみづ	にひみづ	
八三	下	四	はかりの	ばかりの	
七五	下	七	「高きより見る人をして懼れしむ」		
七七	上	五	「蓮のしげりに水のかげろひ」		
七七	上	七	「みそぎするも心地よくして」		